「シンセサイザーの教育実践への活用」

領域名：基礎看護

報告者：山川和歌子

教育及び実践の課題

COVID-19 の影響により、演習や実習、学生同士のつながりの機会が減り、学生からは「期待が外れた」「もっと実習ができると思っていた」「これが看護学生なのか」という声が聞かれた。教員は COVID-19 の影響下でもそれなりに看護学生として学び取ってほしいと考え学習を提供していたが、学生が思い描いたものとのギャップが生じていると思われる。

また、COVID-19 の以前より、臨床現場と大学で教えていることのギャップも生じており、看護師が何をする職業なのか揺らいでしまう学生もいる。

様々な要因により学生から看護職への移行には困難が生じるが、学生が専門職者として成長するために、教員がどのように関わればよいか検討したいと考え文献を選択した。

活用した論文の概要

グラウンデッド・セオリーの手法を用い、看護大学生の看護教育課程での経験を記述し、その過程を明らかにする研究である。大学に適応した看護大学生の教育経験の基本的な社会心理プロセスは「バランスを模索し、専門職としてのアイデンティティを成長させながらサポートネットワークを活用する」であり、コアカテゴリーは【予想外の要望】であった。バランスを模索している学生は【予想外の要望】を感じ、「自信喪失」や「自信」、「自己犠牲」、「厳しさ」、「関連性」の困難を乗り越え、「先入観の放棄」を行い、「看護の風土への順応」に至ることで、看護職者としてのアイデンティティを成長させていた。

教育及び実践への活用

教員は、学生自身がスケジュールを見通せるように、科目のスケジュールや課題の提出期限などを事前に一覧にして伝えるようにしている。一部の学生は、そのスケジュールを活用して、他の科目との自己学習のバランスを模索している様子であった。

また、講義や演習の中で、臨床がイメージできるような取り組みも行っている。例えば、臨床現場で使用頻度が多くなっている物品（閉鎖式輸液回路システムなど）を授業で取り上げることや、模擬電子カルテを活用して演習を行うことを行っている。臨床をイメージしやすくなることで、その後の実習や就職後における「自信喪失」が軽減されると考えている。今後は、学生が自ら専門職者としてアイデンティティを成長させられるように、学生が「自信」をつけられるような教員の関わりや、学生同士でサポートネットワークを構築できるような支援を行っていきたい。

参考文献

Goodolf M.D. Growing a Professional Identity: A Grounded Theory of Baccalaureate Nursing Students. Journal of Nursing Education, 2018;57(12):705-711

2023 年 10 月 23 日